

# 猿新聞

編集・発行  
山村 準  
tel:0595-63-1725  
Email  
jyun.y@asint.jp

## ホームページ開設

名張鳥獣害問題連絡会  
俗称『やまだのかかし』



URL=<http://sarushika.moo.jp>

名張地方は、四方を山に囲まれた狭小な盆地で、耕作地は山地と接しておりサル・シカ・イノシシなどによる鳥獣害が頻発し農業生産の大きな足かせとなっています。その被害は、現在では平野部や住宅街にまで及んでいます。この現状は、個人が解決できる範囲を遙かに超えています。それに加え、農村の共同意識が希薄になった現在では、被害を地域共通の課題としてとらえることが困難となっています。これらを踏まえ、名張市における農林水産並び

ています。

一度這入った水田・畑は安全と考えて毎年来て被害を出しています。最初の侵入を防ぐことが最も大事なことになります。対策については、野生鳥獣全般にいえることですが、あきらめない姿勢が大切です。考えられることはいろいろと試してみましよう。

田んぼや畑は頻繁に見回り、人の存在を意識づけてましよう。

農地の周囲を刈り払い、侵入しやすい繁みを無くして、見晴らしを良くしましよう。

あくまで一時的ですが、臭いや音や光（たとえば花火やラジオ、木酢液など）もある程度の効果は期待できます。急場しのぎには使用を検討してみましよう。

今後に備え、恒久的に本格的な侵入防止柵を、地域全体で協議し設置しましよう。

柵には、電気柵、ワイヤーメッシュ柵、トタン柵等色々ありますが、各々

## イノシシ防護対策

イノシシの能力を知る

矢川三谷川沿いで、イノシシの被害が開始されました。人間の生活域とイノシシの生息域とが重なる山あいでは、毎年の様に農作物に何らかの被害が出

写真Ⅰイノシシおとし（矢川）



写真Ⅱイノシシ被害痕（矢川）



らなければなりません。

イノシシの運動能力はひじょうに高く、成獣では助走なしに120センチ（1歳未満の子イノシシで70センチ）ジャンプする。50センチのものを鼻で持ち上げる事が出来る。

防止柵についてはいづれの場合でもいえることですが、飛び越えよりもくぐり抜け防止が重要で、地際は隙間なくしっかりと

とおおっておく必要があります。

★三谷川沿いの被害は、既設の防護柵の管理不備も考えられます。今後は、見回り草刈りなど、防護柵の保守管理には十分な配慮をお願いします。

平成21年8月12日に鳥獣による農作物の被害の防止を目的とした電気さくによる感電死亡事故が発生。  
農水省

2年前の事故ですが、皆さんご存じでしたか？。

電気事業法に基づく電気設備に関する技術基準を定める省令第74条の規定では、その施設にあつては感電又は火災のおそれのないように施設することとされており、農業者自らが施設する場合を含め、感電防止のための適切な措置を講じることが必要です。

今回の事故では、感電防止のための適切な措置が講じられていなかったことが原因と考えられています。

具体的には、鳥獣被害防止用の電気さくの施設に当たっては、下記事項を遵守すれば感電が防止できますので、感電防止に向けた適切な対応をお願いいたします。

なお、今回のような感電事故の再発を防止するため、8月28日に農林水産省にも安全確保について周知を依頼しました。

①電気さくの電気を30ボルト以上の電源（コンセント用の交流100ボルト等）から供給するときは、電気用品安全法（昭和36年法律第234号）の適用を受ける電源装置（電気用品安全法の技術基準を満たす、電気さく用電源装置）を使用すること。  
②上記①の場合において、

公道沿いなどの人が容易に立ち入る場所に施設する場合、危険防止のために、15ミリアンペア以上の漏電が起ったときに1秒以内に電気を遮断する漏電遮断器を施設すること。

③電気さくを施設する場合は、周囲の人が容易に視認できる位置や間隔、見やすい文字で危険表示を行うこと。  
（農水省HPより）

## アライグマ被害と対策

最近アライグマによる農作物への被害が深刻な問題になっています。

アライグマによる農作物被害は主にトウモロコシ、メロン、イチゴ、ス

イカ。スイカでは前脚が入る程度の穴を開けて中身だけがくりぬかれたり、トウモロコシでは綺麗に皮が剥がされるなどアライグマの被害の痕は特徴的なものが多い。養魚池の錦鯉が食べられたり、北海道では、乳牛の乳首が噛み切られたりする被害が報告されています。市街地周辺に生息するアライグマは、丹誠込めた家庭菜園にも被害を出しています。

期にワナを仕掛けてもまったく捕まりません。アライグマは冬の繁殖時期を過ぎ、出産後の春に住みから出てきます。もっとも効率的に捕獲できるのは、春から初夏です。まだ畑に作物が実る前に捕獲することが捕獲率のアップにつながります。

畑に何もない状態でワナを仕掛けると、お腹が空いたアライグマはエサの匂いに誘われてワナに掛かりやすいのです。餌は、キャラメルコーンとドッグフードまたは、キャットフードも代用できますが、犬、野良猫などがかかることがありますのでご注意ください。★尚、罌の近くには立て看板を設置して、捕獲作業を実施している旨を周知させて下さい。

日本農業新聞（2011年7月15日）抜粋

## 猿対策に隣組連携（宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会）

三重県名張市と奈良県宇陀市で、県境を越えた鳥獣害対策が進んでいる。山を挟んで隣接する両市の住民らが、猿追い犬（モンキードッグ）をこれまでに18匹育て、山村でのパトロールに活躍、猿が寄り付かない地区も出始めた。両市は2006年、鳥獣害を防ぐための広域対策協議会を設立。その一環として、09年に両市の住民から候補犬を募りモンキードッグの育成を始めた。名張市が11匹、宇陀市が7匹を認定した。今年4月には飼主主らが、モンキードッグ倶楽部を結成。住民主体で犬の育成と猿の追い払いに取り組む。倶楽部の代表で、宇陀市室生地区の達（つじ）敏也さん（55）は「モンキードッグの数は多いが、効果は未知数。猿が出没しても、飼主主の都合で追い払いに出動できない場合もある。今後さらに育成する飼主主と犬を増やしていきたい」と話す。広域対策協議会はこれまで、2市にまたがる山に猿の群れ2群がすんでいることを把握し、複数の雌猿に発信機を付けた。毎日、市民ボランティアなどが群れの移動を把握し、人里に近づいたら農家や地域住民に携帯電話のメールで知らせる仕組みも導入した。

名張市の中山間地、赤目地区で暮らす倶楽部メンバー、畠山ひさ子さんは毎日2回、10歳雌「モミジ」と7歳の雄「団十郎」を連れ、人里と山の境目に沿って約4キロ巡回。以前、人里を堂々と歩いていた猿の群れは姿を消した。「群れの移動状況を見ても明らかに私たちの地区を避けている。毎日人と犬がパトロールする地区が増えれば、猿の行動範囲を山奥に狭められるのでは」と、畠山さんは手応えを語る。協議会のアドバイザーとして猿追い払い活動を支援する田村修市さん（60）は「山の生きものは東海とか近畿といった地域分けなど関係なく移動する。人も行政の区分を超えて動物との棲み分けに力を合わせる事が重要だ」と話す。



## 秋の獣害対策

■食べない柿も全て収穫しましょう。柿はサルだけでなく、他の野生動物も人里に呼び寄せてしまします。柿の実の実は全て収穫しましょう。（今年は柿が豊作らしい）。  
■稲の収穫後に田んぼを耕耘しましょう（秋起し）。  
■稲の収穫の後には二番穂がみのり、それをサルやイノシシは狙ってきます。  
■また、秋起しを行うと、雑草を減らしたり、カメムシを減らす効果もあります。  
■サルが出たら大勢で追い払いましょう。人数が多いほど効果がありません（四季共通）。